

実践力のある保育者の育成における短期大学の役割Ⅲ

—保育者を対象とした質問紙調査から—

前 徳 明 子・高 橋 美 枝

The Role of Junior College for Bringing up to a Practical Nursery Teacher and a Practical Kindergarten Teacher III :From A Study of Questionnaire survey for Teachers

MAETOKU Akiko, TAKAHASHI Mie

キーワード：実践力、幼稚園教諭・保育士・保育
教諭育成、質問紙調査

はじめに

乳幼児期は生涯にわたる人格形成の基盤を培う時期であり、その時期の保育、教育を担う保育者の役割は非常に重要である。併せて、少子高齢化による労働人口の減少により、両親が就労している、あるいは就労を希望する家庭は増加しており、待機児童の問題の解決には、質の高い保育者の確保、養成が急務となっている。

さらに、保育者は地域の子育て支援を担う役割を有しており、多様化する社会の中で、保護者や地域の子育て家庭の支援を行っていくことのできる保育者が求められている。

このようなことから、保育者養成校は質の高い保育者の育成を社会から要請されており、保育、幼児教育の現場の中で、優れた保育・教育実践を行うことのできる、実践力のある保育者の育成が期待されている。

この保育者の実践力について、前徳明子・高橋美枝(2018)¹⁾は実践力のある保育者の育成において必要とされる能力、資質とその育成における短期大学の役割について、学士課程教育に求められる諸能力と保育士にふさわしい資質、能力を統合的に概観することから検討した。「教職課程・

保育士課程に求められる学士力」、「保育者としての専門的資質、能力」、「保育者としての人間力」は互いに重なり合っている部分を含んでおり、この3つが合わさったものが保育者に求められる資質、能力になることを明らかにした。

木村直子・橋川喜代美(2008)²⁾は「保育実践力」についての4つの概念を考え、概念ごとの質問項目を作成した。この質問項目は、保育士養成の短期大学、大学の教員を対象に評定を求め作成されたものである。さらに、上山瑠津子・杉村伸一郎(2015)³⁾は、木村・橋川(前述)による「保育実践力尺度」と杉村伸一郎・朴信永・若林紀乃(2009)⁴⁾による保育者の省察尺度を用い、保育士対象の調査を行っている。

一方、前徳明子・高橋美枝(2019)⁵⁾は、保育者に必要な資質、保育者としての成長のプロセスについて保育者自身を対象にインタビュー調査を行うことにより、実践力のある保育者に必要とされる能力、資質とその育成プロセス及び短期大学の役割を検討した。その中で、現役の保育者は新任保育者段階の実践力として、「保育力」「取り組む姿勢」「マナー」「対人力」などを求めており、保育者の養成校としては、これらの実践力を確実に身に付くように保証できるよう育成していくことが必要であることが明らかになった。インタビュー調査により、それぞれの保育者の考えを詳細に調査することができたが、調査対象者の人数が

少なかったことから、質問紙調査により定量的な検定を実施することが課題となった。

そこで、本研究においては、現役の保育者を対象としたインタビューをもとに質問項目を作成した質問紙を用いて、現役の保育者に、保育、幼児教育の中で必要とされる保育者としての実践力及び保育者養成校において育成する実践力についての調査を実施した。

目的

現役の保育者を対象に、保育、幼児教育の中で必要とされる保育者としての実践力について調査するとともに、新任保育者として保育、幼児教育の仕事に就く上で、保育者養成校において育成が必要な実践力についても併せて質問することで、それぞれの要素や構造、両者の関係を明らかにすることを本研究の目的とする。

方法

1. 調査対象

幼稚園に勤務する幼稚園教諭、保育所に勤務する保育士、幼保連携型認定こども園に勤務する保育教諭、保育所以外の福祉施設に勤務する保育士に質問紙調査への協力を要請した。481名から質問紙の回答が得られた。このうち、後述するプロフィール項目の回答内容から保育者ではない、または保育者であることが確認できない7名を除いた。さらに、欠損データのある49名を除き、425名の回答内容を検討した（以下、調査対象者）。有効回答率は88.3%であった。

在職している園、施設別の調査対象者の人数は、保育所が372名、幼稚園が28名、認定こども園が13名、施設が12名であった。調査対象者のプロフィールを表1に示す。

2. 調査内容と質問項目

質問紙の構成は、Ⅰプロフィールを尋ねる項目、Ⅱ保育、幼児教育の中で必要とされる保育

表1 調査対象者のプロフィール

性別	男性	60人
	女性	365人
年齢	20代	208人
	30代	106人
	40代	66人
	50代	34人
	60代	9人
	70代	2人
保育者歴	1年未満	60人
	1年以上3年未満	73人
	3年以上5年未満	60人
	5年以上10年未満	121人
	10年以上20年未満	83人
	20年以上	27人
	20年以上には50年が1名含まれる。	
その他	1人	
常勤・非常勤の別	常勤	309人
	非常勤	104人
	常勤と非常勤の兼務	2人
	未記入	10人
その他役職等 理事長 2人、園長・所長 7人、児童発達支援管理責任者 1人、障害者支援施設管理者 1人、管理者 1人、副園長 5人、主任 25人、副主任 3人、副主幹 1人、専門リーダー 1人、管理職 2人		

者としての実践力、Ⅲ新任保育者として保育、幼児教育の仕事に就く上で、保育者養成校において育成する実践力の3部とした。

ⅡとⅢの質問項目は、結果の比較ができるように質問内容を同一とし、「とても当てはまる」を5、「やや当てはまる」を4、「どちらでもない」を3、「あまり当てはまらない」を2、「全然当てはまらない」を1とする5件法で実施した。

ⅡとⅢの質問項目は、前徳明子・高橋美枝(2019)⁵⁾の「新任時の戸惑い」「新任時身に付ける必要を感じたこと」「実習生や新任に身に付けて欲しいこと」「養成校への要望」「保育者の資質」について、インタビューで得られたプロトコルを元に作成した。55項目が上がったが、調査対象者の負担を考慮し、研究者間での話し合いにより50項目とした。さらに、類似の質問項目が連続しないようになど、質問順についても工夫を行った。実施した質問項目の内容は次のとおりである(表2)。

表2 質問項目の内容

	質問内容
1	ピアノの弾き歌い
2	嘔吐や便の処理
3	保育の流れの理解
4	同僚との関係づくり
5	保護者への対応
6	指導案の立て方
7	地域の専門機関や専門家との連携の構築
8	子どもとの関わり
9	クラスをどうまとめるか
10	手遊び
11	感染症の知識と対応
12	会議の進め方
13	マナー
14	ペープサートやパネルシアター
15	積極的な姿勢
16	あいさつ
17	絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方
18	文章力
19	時間の管理
20	記録の作成の仕方
21	掃除の仕方
22	言葉遣い
23	子どもへの声掛け
24	障がいについての理解
25	わからないことを聞く姿勢
26	製作のアイデア
27	教育制度や法律の理解
28	子どもが好きという気持ち
29	保育者自身の健康管理
30	判断力
31	アレルギーへの対応
32	保護者相談の技術
33	子どもの発達の理解
34	事務処理能力
35	食や栄養の知識と関心
36	コミュニケーション力
37	状況を把握する力
38	返事
39	柔軟な対応力
40	自分の意見が言える
41	笑顔と明るさ
42	児童福祉制度や法律の理解
43	保護者の立場に立った言葉選び
44	周囲への配慮
45	責任感
46	フットワーク
47	発信力
48	向上心
49	臨機応変な対応力
50	見通しをもった保育力

3. 調査方法

研究の主旨を伝え、研究への協力を幼稚園、保育所、施設、認定こども園に依頼した。質問紙の表紙に、研究内容と目的及び研究者、研究者連絡先を記載し、同意事項として①質問紙への協力は自由であり、協力しないことで不利益を被ることがないこと、②無記名で実施し、勤務先名や個人名が公表されることはないこと、③回答内容は統計的に処理し、個人が特定されることはないこと、④調査データの厳重な管理、⑤研究結果の論文投稿など研究成果としての発表の5点を記載し、同意いただける場合に、次ページ以降の質問項目に回答していただくことを明記し、幼稚園、保育所、施設、認定こども園に対しても、あくまで自由意志での協力であることを確認した。

また、園、施設への協力依頼のほかに、幼稚園、保育所、施設、認定こども園に勤務する保育者に個別に協力の依頼を行い、質問紙調査を実施した。

倫理的配慮

調査にあたっては、学校法人小池学園研究倫理規程に基づき、あらかじめ研究テーマ、研究調査の主旨、調査データの扱いや個人情報の保護に関して書面で説明し、同意の得られた場合に質問紙への回答をお願いした。調査内容については、個人情報保護するとともに、情報漏洩の防止に十分配慮し、個人が特定されることのないように配慮した。

結果

1. 分析方法

調査結果は以下の3点から分析を行った。

- ① 保育、幼児教育の中で必要とされる保育者としての実践力（以下、保育者に必要な実践力）と新任保育者として保育、幼児教育の仕事に就く上で、保育者養成校において育成する実践力（以下、養成校での育成が必要な実践力）について、同じ質問項目で調査を行っ

た。質問項目ごとに、保育者に必要な実践力の結果と養成校で育成が必要な実践力の結果を比較した。

ただし、結果の中には等分散性を有していないデータが含まれていることが容易に予想されることから、ウィルコクソン符号付順位和検定を用いて、対応のある群の中央値に差があるかどうかを検定することとした。

② 今回の調査においては、保育者が共通して認識している保育者に必要な実践力及び養成校で育成が必要な実践力が存在することが予想される。テスト理論に基づき、等分散性のあるデータのみを抽出して分析を行うと、このような貴重な知見を見逃してしまいかねない。このことから、質問項目ごとにヒストグラムを作成し、その特徴を分析した。

③ 保育者に必要な実践力及び養成校で育成が必要な実践力の構造を明らかにするために、それぞれについて項目分析を行い、主因子法による因子分析による検討を行った。

これらの分析については、SPSSを使用した。

2. 保育者に必要な実践力と養成校において育成が必要な実践力

後述するように、ヒストグラムから等分散性を有していないデータが含まれていることを確認し、ウィルコクソン符号付順位和検定を用いて、対応のある群の中央値に差があるかどうかを検定する方法で検討した。有意水準5%で帰無仮説の棄却を検討した。

① 帰無仮説が棄却されず、保育者に必要な実践力と養成校において育成が必要な実践力に差が見られなかったのは以下の項目である。

「感染症の知識と対応」「積極的な姿勢」「記録の作成の仕方」「掃除の仕方」「言葉遣い」「子どもへの声掛け」「障がいについての理解」「教育制度や法律の理解」「子どもが好きという気持ち」「保育者自身の健康管理」「子どもの発達の理解」「食や栄養の知識と関心」「返事」「自分の意見が言える」「笑顔と

明るさ」「責任感」「発信力」の17項目は統計的に有意な差が見られなかった。

つまり、現役の保育者はこれらは、保育者として必要な実践力と捉える程度と養成校での育成が必要な実践力と捉える程度が同程度であるということである。

これに対して、保育者に必要な実践力と捉える程度と養成校で育成が必要である実践力と捉える程度の差のある内容も多くみられた。次のとおりである。

② 帰無仮説が棄却され、保育者に必要な実践力の値が、養成校において育成が必要な実践力の値より高い項目は以下のとおりである。()内に有意確率の値を示す。

「嘔吐や便の処理」(p= .000)、「保育の流れの理解」(p= .000)、「同僚との関係づくり」(p= .000)、「保護者への対応」(p= .000)、「地域の専門機関や専門家との連携」(p= .000)、「子どもとの関わり」(p= .000)、「クラスをどうまとめるか」(p= .000)、「会議の進め方」(p= .000)、「時間の管理」(p= .002)、「判断力」(p= .000)、「アレルギーへの対応」(p= .000)、「保護者相談の技術」(p= .000)、「事務処理能力」(p= .001)、「状況を把握する力」(p= .000)、「柔軟な対応力」(p= .000)、「保護者の立場に立った言葉選び」(p= .000)、「周囲への配慮」(p= .031)、「責任感」(p= .000)、「臨機応変の対応力」(p= .000)、「見通しをもった保育力」(p= .000)の20項目であった。

これらの内容は、保育者に必要な実践力として捉えられている程度が、養成校で育成が必要な実践力として捉えられている程度よりも高い。

この中には、養成校において基礎的な知識や理論を身につけることはできるが、保育・幼児教育現場における現実的な実践の中で育ててい必要があると考えられる「嘔吐や便の処理」「同僚との関係づくり」「保護者への対応」「地域の専門機関や専門家との連携」「子

「子どもとの関わり」「クラスをどうまとめるか」「判断力」「アレルギーへの対応」「保護者相談の技術」「状況を把握する力」「柔軟な対応力」「保護者の立場に立った言葉選び」「周囲への配慮」「責任感」「臨機応変な対応力」「見通しをもった保育力」が含まれている。

また、園によってそれぞれの特徴があったり、進め方の異なると考えられる「保育の流れの理解」「会議の進め方」「時間の管理」「事務処理能力」が含まれている。

- ③ 帰無仮説が棄却され、保育者に必要な実践力の値よりも、養成校において育成が必要な実践力の値の方が高い項目は以下のとおりである。() 内に有意確率の値を示す。

「ピアノの弾き歌い」(p= .000)、「指導案の立て方」(p= .025)、「手遊び」(p= .000)、「マナー」(p= .000)、「ペープサートやパネルシアター」(p= .000)、「積極的な姿勢」(p= .000)、「絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方」(p= .002)、「文章力」(p= .001)、「わからないことは聞く姿勢」(p= .015)、「食や栄養の知識と関心」(p= .043)、「児童福祉施設や法律の理解」(p= .039)、「向上心」(p= .000) の12項目であった。

これらの内容は、保育者に必要な実践力として捉えられている程度よりも、養成校で育成が必要な実践力として捉えられている程度の方が高い。

この中には、保育技術の「ピアノの弾き歌い」「手遊び」「ペープサートやパネルシアター」「絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方」や、基礎となる知識、理論として養成校での育成を求めていると考えられる「食や栄養の知識と関心」「児童福祉施設や法律の理解」が含まれている。また、「マナー」「文章力」が含まれており、これらは現場に入る前に身に付けることであると考えられている。さらに、「わからないことは聞く姿勢」「向上心」という前向きな姿勢、態度が含まれていた。

3. 保育者に必要な実践力についての回答分布

質問項目ごとのヒストグラムは、その特徴により3つの群に分けることができた。Ⅰ群、Ⅱ群、Ⅲ群とし検討することとする。

<Ⅰ群>「とても当てはまる」5に半数以上の回答が集中している項目群とした。一例として「保育の流れの理解」のヒストグラムを図1に示す。あわせて、Ⅰ群に分類した項目群の度数分布表を表3に示す。

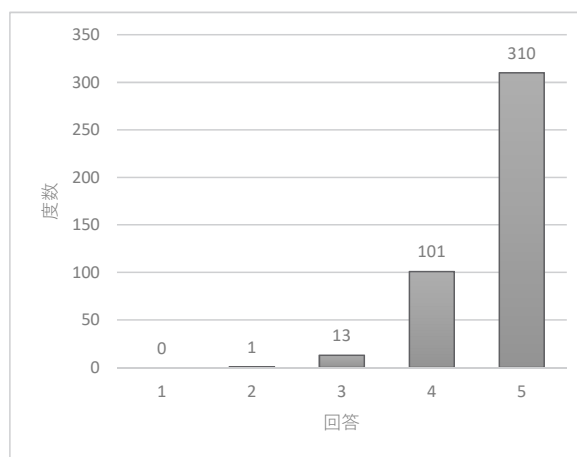


図1 「保育の流れの理解」のヒストグラム

表3 Ⅰ群の度数分布表

項目番号	項目内容	度数(回答数)				
		1	2	3	4	5
2	嘔吐や便の処理	0	4	26	150	245
3	保育の流れの理解	0	1	13	101	310
4	同僚との関係づくり	0	2	28	139	256
5	保護者への対応	0	6	19	102	298
8	子どもとの関わり	0	1	16	59	349
9	クラスをどうまとめるか	1	7	29	117	271
11	感染症の知識と対応	0	14	36	150	225
13	マナー	0	6	38	142	239
15	積極的な姿勢	0	6	32	130	257
16	あいさつ	0	0	14	66	345
19	時間の管理	1	6	37	160	221
22	言葉遣い	0	5	24	95	301
23	子どもへの声掛け	0	3	22	84	316
24	障がいについての理解	0	12	42	143	228
25	わからないことを聞く姿勢	0	3	17	110	295
28	子どもが好きという気持ち	0	1	14	55	355
29	保育者自身の健康管理	0	5	21	96	303
30	判断力	0	4	36	134	251
31	アレルギーへの対応	0	3	24	103	295
32	保護者相談の技術	0	14	55	140	216

33	子どもの発達の理解	0	3	31	110	281
36	コミュニケーション力	0	6	27	126	266
37	状況を把握する力	0	0	30	123	272
38	返事	0	1	17	94	313
39	柔軟な対応力	0	4	27	116	278
41	笑顔と明るさ	1	4	18	71	331
43	保護者の立場に立った言葉選び	0	2	31	112	280
44	周囲への配慮	0	1	35	121	268
45	責任感	0	0	22	103	300
46	フットワーク	1	4	47	158	215
48	向上心	0	2	34	130	259
49	臨機応変な対応力	0	4	26	111	284
50	見通しをもった保育力	0	2	35	118	270

I群に含まれる質問項目は50項目中33項目と最も多かった。保育者に必要な実践力について、かなり共通した意識が持たれていると考えられる。

<II群>「とても当てはまる」5と「やや当てはまる」4の両方が多く、5と4を合わせて80%を超えているが、I群ではない項目群とした。一例として「絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方」のヒストグラムを図2に示す。あわせて、II群に分類した項目群の度数分布表を表4に示す。

II群に含まれる質問項目は、50項目中12項目であった。「とても当てはまる」「やや当てはまる」の合計が80%を超えていることは、これらの項目についても、保育者に必要な実践力と共通して認識されていると言える。

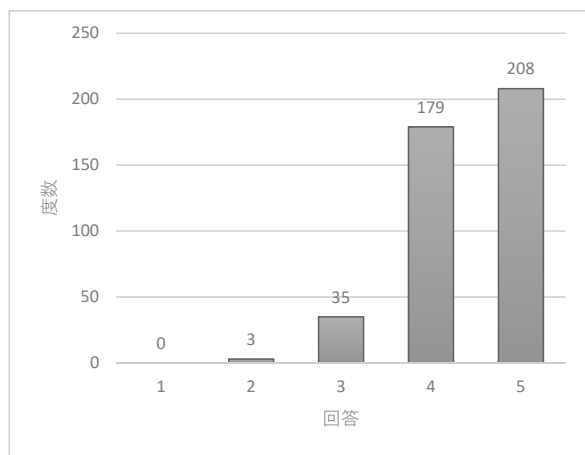


図2 「絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方」のヒストグラム

表4 II群の度数分布表

項目番号	項目内容	度数 (回答数)				
		1	2	3	4	5
1	ピアノの弾き歌い	13	45	54	206	107
6	指導案の立て方	2	7	47	174	195
10	手遊び	1	9	38	194	183
17	絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方	0	3	35	179	208
18	文章力	3	14	50	199	159
20	記録の作成の仕方	1	7	56	184	177
21	掃除の仕方	2	4	60	218	141
26	製作のアイデア	2	13	70	187	153
27	教育制度や法律の理解	0	21	83	212	109
35	食や栄養の知識と関心	0	8	73	202	142
40	自分の意見が言える	0	7	48	184	186
47	発信力	0	10	69	175	171

<III群>「ややあてはまる」4が高いが、1～5に分布が広がっている項目群とした。一例として「地域の専門機関や専門家との連携の構築」のヒストグラムを図3に示す。あわせて、III群に分類した項目群の度数分布表を表5に示す。

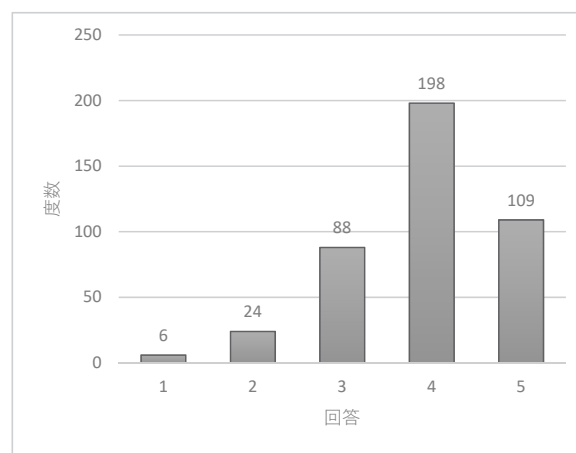


図3 「地域の専門機関や専門家との連携の構築」のヒストグラム

表5 III群の度数分布表

項目番号	項目内容	度数 (回答数)				
		1	2	3	4	5
7	地域の専門機関や専門家との連携の構築	6	24	88	198	109
12	会議の進め方	13	25	127	183	77
14	ペーパーサートやパネルシアター	3	20	87	201	114
34	事務処理能力	3	20	114	206	82
42	児童福祉制度や法律の理解	1	19	89	199	117

Ⅲ群の質問項目は5項目であった。「地域の専門機関や専門家との連携の構築」や「児童福祉制度や法律の理解」についての意識は、分布が広がっていた。「会議の進め方」「事務処理能力」は個人差だけでなく職場環境によっても差があると考えられる。保育技術の中でも「ペアプサートやパネルシアター」は保育者に必要な実践力としての認識には回答者により差があるという結果となった。

4. 養成校において育成が必要な実践力の回答分布

質問項目ごとのヒストグラムは、その特徴により3つの群に分けることができた。Ⅰ群、Ⅱ群、Ⅲ群とし検討することとする。

<Ⅰ群>「とても当てはまる」5に半数以上の回答が集中している項目群とした。一例として「子どもが好きという気持ち」のヒストグラムを図4に示す。あわせて、Ⅰ群に分類した項目群の度数分布表を表6に示す。

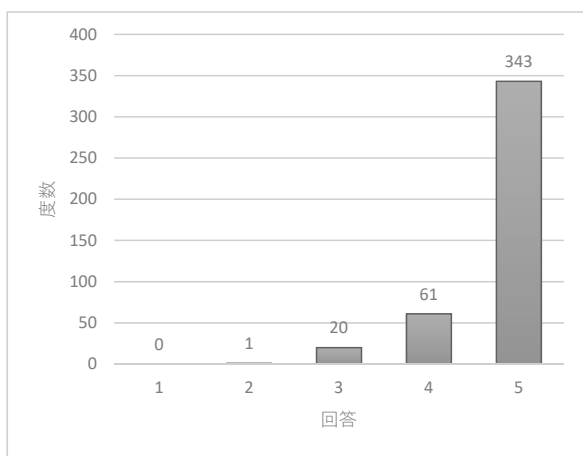


図4 「子どもが好きという気持ち」のヒストグラム

表6 Ⅰ群の度数分布表

項目番号	項目内容	度数 (回答数)				
		1	2	3	4	5
8	子どもとの関わり	0	2	26	96	301
10	手遊び	0	2	21	115	287
11	感染症の知識と対応	0	5	35	172	213
13	マナー	1	3	24	125	272
15	積極的な姿勢	0	2	15	107	301

16	あいさつ	0	1	9	64	351
17	絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方	1	4	28	143	249
22	言葉遣い	0	3	19	89	314
23	子どもへの声掛け	0	3	19	83	320
25	わからないことを聞く姿勢	0	2	18	81	324
28	子どもが好きという気持ち	0	1	20	61	343
29	保育者自身の健康管理	0	2	28	99	296
31	アレルギーへの対応	0	5	36	144	240
33	子どもの発達の理解	0	3	29	130	263
36	コミュニケーション力	0	1	32	141	251
38	返事	0	0	19	83	323
39	柔軟な対応力	1	2	42	147	232
40	自分の意見が言える	2	2	55	149	217
41	笑顔と明るさ	0	0	19	61	345
43	保護者の立場に立った言葉選び	2	3	47	138	235
44	周囲への配慮	0	1	36	149	239
45	責任感	0	3	30	122	270
46	フットワーク	0	0	45	150	230
48	向上心	0	1	23	104	297
50	見通しをもった保育力	1	7	48	149	220

Ⅰ群に含まれる項目は50項目中25項目と最も多かった。養成校において育成が必要な実践力についても、かなり共通した意識が持たれていると考えられる。

<Ⅱ群> 「とても当てはまる」5と「やや当てはまる」4の両方が多く、5と4を合わせて80%を超えているが、Ⅰ群ではない項目群とした。一例として「指導案の立て方」のヒストグラムを図5に示す。あわせて、Ⅱ群に分類した項目群の度数分布表を表7に示す。

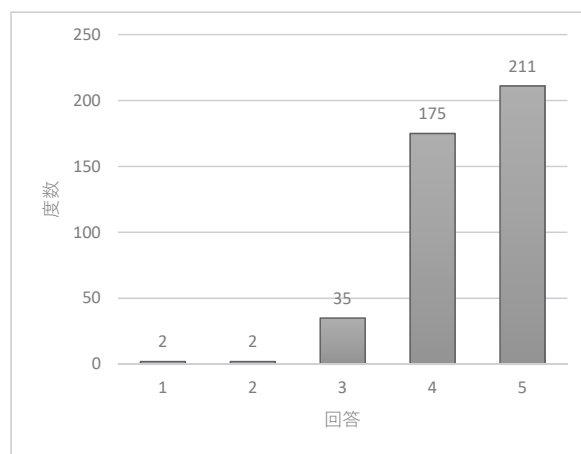


図5 「指導案の立て方」のヒストグラム

表7 II群の度数分布表

項目番号	項目内容	度数 (回答数)				
		1	2	3	4	5
1	ピアノの弾き歌い	1	18	53	196	157
2	嘔吐や便の処理	3	18	64	176	164
3	保育の流れの理解	1	7	61	164	192
5	保護者への対応	2	10	67	156	190
6	指導案の立て方	2	2	35	175	211
14	ペープサートやパネルシアター	2	5	36	175	207
18	文章力	2	2	55	174	192
19	時間の管理	0	7	62	159	197
20	記録の作成の仕方	2	8	63	165	187
24	障がいについての理解	0	5	46	163	211
26	製作のアイデア	1	3	51	177	193
30	判断力	2	11	66	166	180
35	食や栄養の知識と関心	0	4	67	196	158
37	状況を把握する力	1	3	39	178	204
47	発信力	1	7	68	167	182

II群に含まれる項目は50項目中15項目あり、これらの項目も養成校による育成が必要な実践力と共通して認識されている。

<III群> 「ややあてはまる」4が高いが、1～5に分布が広がっている項目群とした。一例として「教育制度や法律の理解」のヒストグラムを図6に示す。あわせて、III群に分類した項目群の度数分布表を表8に示す。

III群に含まれる「同僚との関係づくり」「地域の専門機関や専門家との連携の構築」「教育制度や法律の理解」「保護者相談の技術」は養

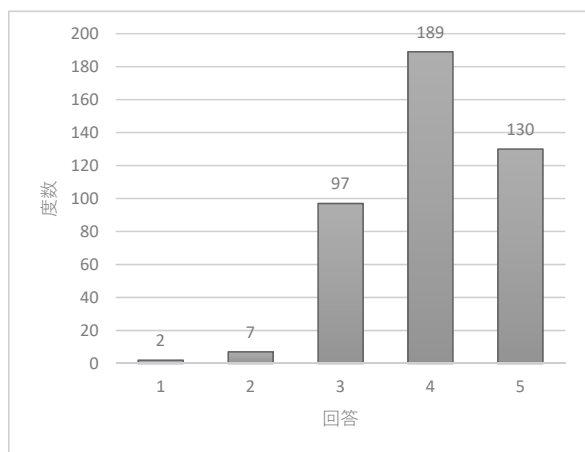


図6 「教育制度や法律の理解」のヒストグラム

成校への期待についての意識に個人差がみられると言える。

表8 III群の度数分布表

項目番号	項目内容	度数 (回答数)				
		1	2	3	4	5
4	同僚との関係づくり	1	14	84	165	161
7	地域の専門機関や専門家との連携の構築	6	28	133	170	88
27	教育制度や法律の理解	2	7	97	189	130
32	保護者相談の技術	1	18	92	168	146

<IV群> I～III群に当てはまらないその他をIV群とした。IV群に含まれる3項目のうち、「クラスをどうまとめるか」、「掃除の仕方」の2項目は、「とても当てはまる」5がやや高く分布し、全体に分布は広がっている。「会議の進め方」は「どちらでもない」3が高く分布が広がっている。IV群に分類した項目群の度数分布表を表9に示す。3項目ともに分布の広がり大きい。

表9 IV群の度数分布表

項目番号	項目内容	度数 (回答数)				
		1	2	3	4	5
9	クラスをどうまとめるか	2	15	73	152	183
12	会議の進め方	12	49	165	130	69
21	掃除の仕方	5	9	76	157	178

5. 保育者に必要な実践力の構造

保育者に必要な実践力の構造を明らかにするために、主因子法による因子分析を行って因子構造を検討する。

そのために、保育者に必要な実践力についての質問項目について項目分析を行う。まず、各項目についての平均値と標準偏差を求め、天井効果の見られる36項目を削除した。フロア効果による削除項目はなかった。天井効果により削除した項目を表10に示す。

表10 保育者に必要な実践力において天井効果により削除した項目

項目番号	質問内容	平均	SD
2	嘔吐や便の処理	4.50	.656
3	保育の流れの理解	4.69	.537
4	同僚との関係づくり	4.53	.640
5	保護者への対応	4.63	.639
6	指導案の立て方	4.30	.767
8	地域の専門機関や専門家との連携の構築	4.78	.512
9	クラスをどうまとめるか	4.53	.717
10	手遊び	4.29	.736
11	感染症の知識と対応	4.38	.777
13	マナー	4.44	.715
16	あいさつ	4.78	.489
17	絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方	4.39	.668
19	時間の管理	4.40	.727
22	言葉遣い	4.63	.647
23	子どもへの声掛け	4.68	.604
24	障がいについての理解	4.38	.777
25	わからないことを聞く姿勢	4.64	.595
28	子どもが好きという気持ち	4.80	.492
29	保育者自身の健康管理	4.64	.633
30	判断力	4.49	.691
31	アレルギーへの対応	4.62	.625
32	保護者相談の技術	4.31	.820
33	子どもの発達の理解	4.57	.659
36	コミュニケーション力	4.53	.679
37	状況を把握する力	4.57	.622
38	返事	4.69	.555
39	柔軟な対応力	4.57	.655

40	自分の意見が言える	4.29	.730
41	笑顔と明るさ	4.71	.613
43	保護者の立場に立った言葉選び	4.58	.648
44	周囲への配慮	4.54	.654
45	責任感	4.65	.575
46	フットワーク	4.37	.735
48	向上心	4.52	.662
49	臨機応変な対応力	4.59	.650
50	見通しを持った保育力	4.54	.665

次に、残りの14項目について、項目得点と当該項目を除いて算出した項目得点との間の相関係数を求めた。さらに全項目での α 係数と各項目を削除した場合の α 係数を比較した。各項目を削除した α 係数はすべて、全14項目での α 係数.938を上回っておらず、この手続きによる削除項目はなかった。また、項目得点と当該項目を除いて算出した項目得点との間の相関係数を求めると、全ての項目で中程度以上の相関がみられた。保育者に必要な実践力の項目分析の結果を表11に示す。

さらに、主因子法（プロマックス回転）による因子分析を行ったところ、1因子のみが抽出された。因子負荷量が.400を下回る項目はなかった。つまり、これらの14項目は一つのまとまりとしての構造を持っているということができ、これは、全体として‘保育者に必要な力’を示していると言える。

表11 保育者に必要な実践力の項目分析結果

	質問内容	平均	SD	α	γ
1	ピアノの弾き歌い	3.82	1.024	.938	.535
7	地域の専門機関や専門家との連携の構築	3.89	.898	.932	.699
12	会議の進め方	3.67	.941	.930	.746
14	ペープサートやパネルシアター	3.95	.851	.931	.718
15	積極的な姿勢	4.50	.697	.933	.668
18	文章力	4.17	.812	.930	.752
20	記録の作成の仕方	4.24	.759	.929	.797
21	掃除の仕方	4.16	.728	.936	.553
26	製作のアイデア	4.12	.823	.931	.714
27	教育制度や法律の理解	3.96	.806	.931	.735
34	事務処理能力	3.81	.824	.932	.684
35	食や栄養の知識と関心	4.12	.753	.931	.721
42	児童福祉制度や法律の理解	3.97	.828	.931	.725
47	発信力	4.19	.789	.931	.712

α ：当該の項目を削除した場合の α 係数（14項目では.938）

γ ：項目得点と当該項目を除いて算出した項目得点との間の相関係数

6. 養成校において育成が必要な実践力の構造

養成校において育成が必要な実践力の構造を明らかにするために、主因子法による因子分析を行って因子構造を検討する。

そのために、養成校において育成が必要な実践力についての質問項目について項目分析を行う。まず、各項目についての平均値と標準偏差を求め、天井効果の見られる40項目を削除した。フロア効果による削除項目はなかった。天井効果により削除した項目を表12に示す。

表12 養成校において育成が必要な実践力において天井効果により削除した項目

項目番号	質問内容	平均	SD
3	保育の流れの理解	4.27	.782
5	保護者への対応	4.23	.831
6	指導案の立て方	4.39	.699
8	地域の専門機関や専門家との連携の構築	4.64	.618
9	クラスをどうまとめるか	4.17	.870
10	手遊び	4.62	.604
11	感染症の知識と対応	4.40	.690
13	マナー	4.56	.656
14	ペープサートやパネルシアター	4.36	.728
15	積極的な姿勢	4.66	.568
16	あいさつ	4.80	.466
17	絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方	4.49	.684
18	文章力	4.30	.745
19	時間の管理	4.28	.772
20	記録の作成の仕方	4.24	.806
21	掃除の仕方	4.16	.874
22	言葉遣い	4.68	.592
23	子どもへの声掛け	4.69	.587
24	障がいについての理解	4.36	.721
25	わからないことを聞く姿勢	4.71	.565

26	製作のアイデア	4.31	.726
28	子どもが好きという気持ち	4.76	.542
29	保育者自身の健康管理	4.62	.629
30	判断力	4.20	.628
31	アレルギーへの対応	4.46	.699
33	子どもの発達の理解	4.54	.655
36	コミュニケーション力	4.51	.645
37	状況を把握する力	4.37	.698
38	返事	4.72	.542
39	柔軟な対応力	4.43	.708
40	自分の意見が言える	4.36	.758
41	笑顔と明るさ	4.77	.518
43	保護者の立場に立った言葉選び	4.41	.751
44	周囲への配慮	4.47	.659
45	責任感	4.55	.657
46	フットワーク	4.44	.677
47	発信力	4.23	.790
48	向上心	4.64	.595
49	臨機応変な対応力	4.42	.746
50	見通しを持った保育力	4.36	.766

次に、残りの10項目について、項目得点と当該項目を除いて算出した項目得点との間の相関係数を求めた。さらに全項目での α 係数と各項目を削除した場合の α 係数を比較した。全項目の α 係数より顕著に α 係数が高く、また相関の低い1項目（「ピアノの弾き歌い」）を削除して、全9項目とした。削除後の α 係数は.905となり、内的整合性は高いといえる。さらに、主因子法（プロマックス回転）による因子分析を行ったところ、2因子が抽出された。因子負荷量が.400を下回る項目はなかった。

養成校において育成が必要な実践力の項目分析の結果を表13に示す。さらに、養成校において育成が必要な実践力の因子分析の結果を表14に示す。

表13 養成校において育成が必要な実践力の項目分析の結果

	質問内容	平均	SD	α	γ
2	嘔吐や便の処理	4.13	.869	.891	.625
4	同僚との関係づくり	4.11	.848	.899	.502
7	地域の専門機関や専門家との連携の構築	3.72	.913	.880	.780
12	会議の進め方	3.46	.988	.885	.718
27	教育制度や法律の理解	4.03	.802	.887	.697
32	保護者相談の技術	4.04	.867	.885	.718
34	事務処理能力	3.68	.908	.884	.733
35	食や栄養の知識と関心	4.20	.728	.888	.682
42	児童福祉制度や法律の理解	4.04	.788	.889	.657

α : 当該の項目を削除した場合の α 係数（9項目では.905）

γ : 項目得点と当該項目を除いて算出した項目得点との間の相関係数

表 14 養成校において育成が必要な実践力の因子分析
(主因子法、プロマックス回転後)

	項目	因子 1	因子 2
12	会議の進め方	.870	-.062
34	事務処理能力	.707	.122
2	嘔吐や便の処理	.703	-.013
4	同僚との関係づくり	.696	-.140
7	地域の専門機関や専門家との連携の構築	.684	.192
32	保護者相談の技術	.670	.138
42	児童福祉制度や法律の理解	-.124	.993
27	教育制度や法律の理解	-.022	.912
35	食や栄養の知識と関心	.245	.564
	寄与	4.803	.848
	寄与率 (%)	53.372	9.426

この2因子のうち、「会議の進め方」「事務処理能力」「嘔吐や便の処理」「同僚との関係づくり」「保護者相談の技術」から構成される因子は、「現場で必要とされる力」ということができる。「児童福祉制度や法律の理解」「教育制度や法律の理解」「食や栄養の知識と関心」から構成される因子は、「制度理解・知識」と言える。

考察

1. 保育者に必要な実践力

保育者に必要な実践力として、回答割合が最も高かった項目は「子どもが好きという気持ち」で、83.5%が「とても当てはまる」と回答し、「やや当てはまる」と合わせると96.4%が保育者に必要な実践力と回答した。現役の保育者が共通して、保育者に必要な実践力の基盤となるものとして捉えていると考えられる。

回答分布のⅠ群に分類された保育者が共通して保育者に必要な実践力と捉えている項目は、『人として基本となる力や姿勢』と『保育者としての保育力』から構成された。

『人として基本となる力や姿勢』は18項目あり、「マナー」「あいさつ」「時間の管理」「言葉遣い」「保育者自身の健康管理」「コミュニケーション力」「返事」「笑顔と明るさ」「周囲への配慮」「積極性」「わからないことを聞く姿勢」「判断力」

「状況を把握する力」「柔軟な対応力」「責任感」「フットワーク」「向上心」「臨機応変の対応力」であった。保育者に共通して認識されている保育者としての実践力として、『人として基本となる力や姿勢』が多いことは興味深い。

『保育者としての保育力』は15項目あり、「保育の流れの理解」「子どもとの関わり」「クラスをどうまとめるか」「子どもへの声掛け」「子どもの発達の理解」「見通しをもった保育力」「子どもが好きという気持ち」「同僚との関係づくり」「保護者への対応」「保護者相談の技術」「保護者の立場に立った言葉選び」「嘔吐や便の処理」「感染症の知識と対応」「アレルギーへの対応」「障がいについての理解」であった。

これに対して、保育者に必要な実践力としてⅠ群の次に保育者に認識されているⅡ群は、その多くが『具体的な保育技術』から構成されている。「ピアノの弾き歌い」「手遊び」「絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方」「製作のアイデア」「指導案の立て方」「記録の作成の仕方」「掃除の仕方」が『具体的な保育技術』と言える。そして、『具体的な保育技術』を支える『保育力を支える力』である「文章力」「教育制度や法律の理解」「食や栄養の知識と関心」「自分の意見が言える」「発信力」がⅡ群には含まれている。

2. 養成校において育成が必要な実践力

養成校において育成が必要な実践力として、回答割合が最も高かった項目は「あいさつ」で、82.5%が「とても当てはまる」と回答し、「やや当てはまる」と合わせると97.6%が養成校において育成が必要な実践力と回答した。現役の保育者が共通して、養成校に期待している実践力であると言える。

回答分布のⅠ群に分類された保育者が共通して養成校において育成が必要な実践力と捉えている項目は、『人として基本となる力や姿勢』と『保育者としての保育力』から構成された。

『人として基本となる力や姿勢』は15項目あり、「マナー」「積極的な姿勢」「あいさつ」「言葉遣

い」「わからないことを聞く姿勢」「保育者自身の健康管理」「コミュニケーション力」「返事」「柔軟な対応力」「自分の意見が言える」「笑顔と明るさ」「周囲への配慮」「責任感」「フットワーク」「向上心」であった。保育者が共通して養成校に期待している実践力としても、『人として基本となる力や姿勢』が多いことは興味深い。

『保育者としての保育力』は10項目あり、「子どもとの関わり」「子どもへの声掛け」「子どもの発達の理解」「見通しをもった保育力」「子どもが好きという気持ち」「保護者の立場に立った言葉選び」「手遊び」「絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方」「感染症の知識と対応」「アレルギーへの対応」であった。

これに対して、養成校において育成が必要な実践力としてI群の次に保育者に認識されているII群は、『保育力を支える力』と『保育者としての保育力』から構成されている。『保育力を支える力』は8項目あり、「保育の流れの理解」「文章力」「障がいについての理解」「判断力」「食や栄養の知識」「時間の管理」「状況を判断する力」「発信力」である。『保育者としての保育力』は「ピアノの弾き歌い」「ペープサートやパネルシアター」「嘔吐や便の処理」「保護者への対応」「指

導案の立て方」「記録の作成の仕方」「製作のアイデア」の7項目である。

3. 保育者に必要な実践力と養成校において育成が必要な実践力

保育者に必要な実践力と養成校において育成が必要な実践力の構造に違いがあるかを検討するため、同じ項目を用いた調査を行い、項目分析の手続きを経て、因子分析を実施し因子構造を検討した。保育者に必要な実践力では、‘保育者に必要な力’の1因子が抽出された。養成校において育成が必要な実践力では、‘現場で必要とされる力’と‘制度理解・知識’の2因子が抽出された。このことから、保育者に必要な実践力と養成校において育成が必要な実践力とは、異なる構造を持つことが明らかになった。

保育者に必要な実践力と養成校で育成が必要な実践力の比較において、養成校における育成が必要な実践力の値が高い項目は、『保育技術』『基礎となる知識、理論』『マナーや文章力の基礎力』『前向きな姿勢、態度』となる。

養成校の教育においては、保育者に必要な実践力を踏まえつつ、養成校において育成が必要な実践力を学生が確実に身に付けていくような教育を

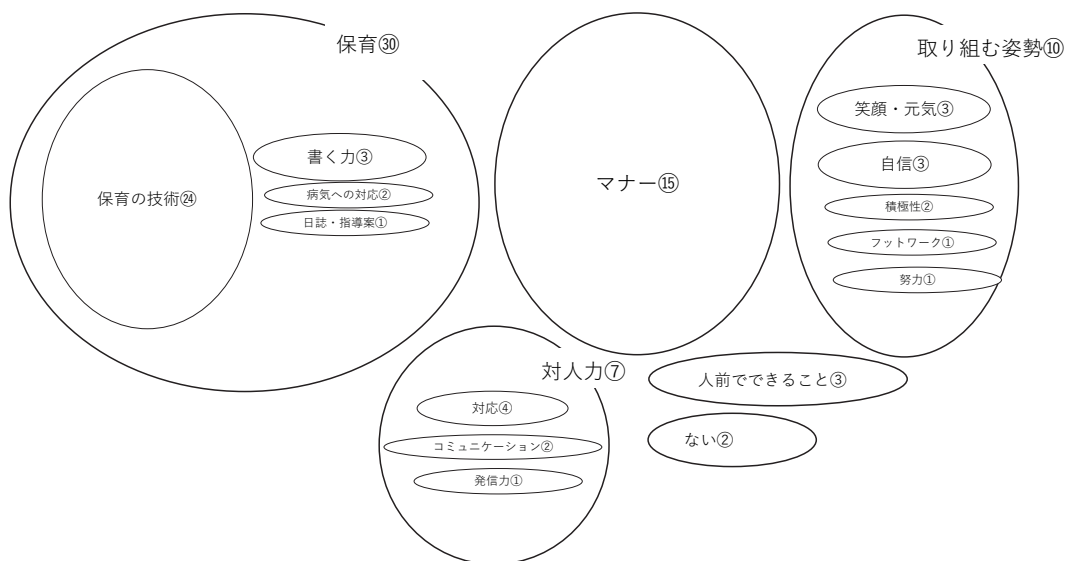


図7 「養成校への要望」のインタビュー内容のカテゴリー図

出典 前徳明子・高橋美枝 (2019)「実践力のある保育者の育成における短期大学の役割Ⅱ—インタビュー結果の分析から—」小池学園研究紀要第17巻 p.6

行っていくことが期待される。

4. まとめと今後の課題

本研究で明らかになったように、保育者としての実践力として96.4%の保育者が「子どもが好きという気持ち」をあげていた。この項目は、保育者に必要な実践力と養成校において育成が必要な実践力との差が見られない項目であり、養成校の教育の中で子どもたちと触れ合う機会を通して、「子どもが好きという気持ち」を維持し、現場に入っていけるように育成していく必要がある。

養成校での教育では、『保育技術』『基礎となる知識、理論』『マナーや文章力の基礎力』『前向きな姿勢、態度』が実践力としての育成を期待されている。これは、前徳明子・高橋美枝（2019）⁵⁾（前掲）において、「養成校への要望」のカテゴリー一図（図7）と一致した結果であると言える。インタビューによる研究により得られた結果が、質問紙を用いた量的な検定において裏付けられたと考えられる。

本研究における調査では、保育所、幼稚園、認定こども園、施設とさまざまな現場で勤務している保育者を対象とした。しかし、調査対象者のなかの保育所在籍者が非常に多かったことから、在職先別の検討は行わず、全調査対象者のデータを元に分析を行った。今後、保育所在籍者の回答から無作為抽出を行い、他の勤務先調査対象者数とサイズを揃え、勤務先による実践力についての意識の違いを検討する予定である。

付記

本研究にご協力いただいた保育者の皆さまに深く感謝申し上げます。

引用文献

1) 前徳明子・高橋美枝（2018） 実践力のある保育者の育成における短期大学の役割，小池学園研究紀要，16，pp21-32.

- 2) 木村直子・橋川喜美代（2008）「保育実践力」尺度作成に関する研究－保育士・幼稚園教諭養成校教員の考える保育実践力を手がかりに－，保育士養成研究，26，pp33-38.
- 3) 上山瑠津子・杉村伸一郎（2015） 保育者による実践力の認知と保育経験および省察との関連，教育心理学研究，63，pp401-411.
- 4) 杉村伸一郎・朴信永・若林紀乃（2009） 保育における省察の構造，幼年教育研究年報，31，pp5-14.
- 5) 前徳明子・高橋美枝（2019） 実践力のある保育者の育成における短期大学の役割Ⅱ－インタビュー結果の分析から－，小池学園研究紀要，17，pp1-13.

前徳明子（埼玉東萌短期大学教授）

高橋美枝（埼玉東萌短期大学教授）

